

芳賀矢一読本における書簡文教材の一考察

一落合直文・吉田弥平との比較を視座に一

A Consideration of Epistolary Educational Materials in the Tokuhon,
an old Japanese textbook, edited by Yaichi Haga:
A Comparison with those of Naobumi Ochiai and Yahei Yoshida

中嶋真弓
NAKASHIMA Mayumi

1. 問題の所在

文部省高等学務局は1898(M31)年に『尋常中学校教科細目調査報告書』(以下「細目」)を発行している。「細目」について甲斐雄一郎(2008)は、「(この「細目」は引用者補)公的な基準がないために中学校間で生じた教科内容の差異の解消を図ることを目的として、文部省が各教科ごとに調査委員を委嘱して作成させたものである」(p.246)としている。そして甲斐雄一郎(2005)は、「これら(「細目」引用者補)は若干の修正を経た上で中学校令施行規則(明治34年)および中学校教授要目(明治35年、以下「要目」)に反映している。(中略)「細目」で提示された各学年の『程度』も、いくつかの差異は認められるものの、原則は中学校教授要目に継承されている」(p.128)と記している。「細目」を作成した国語担当の委員は、上田萬年、高津鋏三郎、小中村義象、芳賀矢一の4名である。明治期の教科内容を明確にした「要目」の基本的な考えを示したものが「細目」といえる。委員の1人である芳賀矢一は、「要目」後の1905(M38)年に『中等教科明治読本』を発行し、その後、『新定中学読本』、『新定女子読本』、『帝国読本』も発行している。

そこで、本稿では「細目」作成に関わった芳賀矢一編纂中学読本を検討することによって、当時求められていた書簡文教材がどのようなもので、教材としてどのような役割を有していたかを検討することを目的とする。これが、明治期の書簡文教材史において意義あることと考えるからである。その課題に応えるために次のような研究方法で行う。

- ・ 芳賀矢一編纂中学読本に採録された書簡文を内容、文体、頭語・結語の観点から検討する。
- ・ 同時期に発行された、落合直文編纂中学読本、吉田弥平編纂中学読本との比較をとおして、明治期の書簡文について検討する。なお、落合直文編纂中学読本および吉田弥平編纂中学読本においては、その都度読本名を提示する。

対象とする芳賀矢一編纂中学読本は、以下のものとする。

- ・ 『中等教科明治読本』(1905(M38).11.15発行)・・・『芳賀中38年版』とする。
- ・ 『再訂明治読本』(1910(M45).1.17再訂4版発行)・・・『芳賀中43年版』とする。

井上敏夫(1981)は、芳賀矢一『明治読本』について『国語教育史資料第二巻 教科書史』の「解題」に「当時の他の教科書に比べて特にめだつ点は、口語文教材が他の教科書では低学年に限られているのに対して、高学年になるにしたがって数は減少しても一応、全学年に配分されていることである。特に大きな特徴というべき点は、古典教材が他と比べてきわめて少なく、ふつうは一〇パーセント前後であるのに対して半分の五パーセントである。芳賀の編纂方針がうかがわれる」(p.260)と述べている。

2. 芳賀矢一編纂中学読本の内容の特徴

〈表1〉『芳賀中38年版』の書簡文教材一覧

巻	課名	文体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)	差出人・受取人・年月日	出典
1	1-7 学友慰問の文	口語文体	見舞	御病氣は昨今いかがですか。	貴の病氣を見んことを切に祈ります。	一年級を代表して、青山丹治 楠田良彦 兄来下	
	1-17 陸軍兵の生活	様文文体	報知	前略、	不一。	某師團歩兵第三 連隊第一中隊 何月日 山村幸一	坪内雄藏高等國語讀本
	1-18 海軍兵の生活	混合文体	報知	拝啓、	敬具。	年月日 茶藤 大瀧五郎	
2	2-8 母を喜ひたる友に	様文文体	弔意	拝啓、	頓首。	月日 山田五郎 岸上三作殿	
	2-27 妹へ手紙	様文文体	通称:礼状	父上様母上様はじめ、	早々。	竹雄 まつ子殿	
3	3-10 小笠原島だより	混合文体	通称(通書)	一書拝啓仕候。	勿々頓首。		田口卯吉帝國讀本より
	3-20 英國宣戦の原因	様文文体	忠告	英國が今日の如き宣戦圖と相成候は、	大功業を立てたきものに御慶候。		
4	4-2 三老人	混合文体	忠告	昨日当村役場に於て	悟り候。		
	4-12 樺太	様文文体	報知	樺太の面積は	謹言。		
5	5-5 留春の筵	混合文体	招待	肅啓	萬期拝光候。		竹越与三郎三又書翰
	5-8 越後より東京に	様文文体	通称(通書)	肅啓	(下略となっている)		竹越与三郎三又書翰
	5-24 銀行に入りし少年に	様文文体	忠告	肅啓	縦断相試みたく存候。		竹越与三郎三又書翰
6	6-3 朝顔をおくる	様文文体	贈答	肅啓	一大革新ならんと存候。		竹越与三郎三又書翰
	6-9 パノラマの構造	様文文体	忠告	「パノラマ」かくには、	勿々		森岡外、つき草
7	7-8 香川景樹の書翰	様文文体	忠告	御詠よほどかはり候て、	さらぬ方にと相折候也。		香川景樹
8	8-7 修善寺	混合文体	報知	三啓。	草々拝具。		尾崎紅葉草紅葉
9	書簡文無し						
10	10-17 茶生にあたふ	文語文体	忠告	寒威とみに加りたるを、	千萬自重せよ。		落合直文、萩家遺稿
【備考】							
・目次には各課名の書簡文には(書翰文)と書かれているが、表では省略する。							

〈表2〉『芳賀中43年版』の書簡文教材一覧

巻	課	課名	文体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)	差出人・受取人・年月日	出典
1	29	1-3 田舎の友より	横文体	報知	拝啓、	匆々		藤岡作太郎園語読本
		1-7 海軍兵の生活	混合文体	報知	拝啓、	敬具。	年月日 兼雄 大演五郎	
		1-8 陸軍兵の生活	横文体	報知	前略、	不一。	某師團歩兵第三連隊第一中隊 何月日 山村幸一	坪内建勲高等園語読本
		1-10 学友慰問の文	口語文体	見舞	御病氣は許いかどですか。	書の送達を見んことを切に祈ります。	一年歳を代表して、青山丹治 楠田良彦兄案下	
2	29	2-3 母を養ひたる友に	横文体	弔意	拝啓、	頓首。	月日 山田五郎 有上三作蔵	
3	30	3-12 小笠原島だより	混合文体	報知(兼書)	一書拝啓仕候。	匆々頓首。		田口卯吉帝國園語本より
		3-27 外国語を知るの必要	混合文体	忠告	拝啓。	敬具。		塚越芳太郎
4	31	4-3 三老人	混合文体	忠告	昨日当村役場に於て	悟り候。		
		4-15 樺太	横文体	報知	樺太の面積は	謹言。		
5	31	5-6 留春の筵	混合文体	招待	肅啓	萬期拝光候。		竹越与三郎三又書翰
		5-9 越後より東京に	横文体	報知(兼書)	肅啓	(下略となっている)		竹越与三郎三又書翰
		5-26 銀行に入りし少年に	横文体	忠告	肅啓	懇話相談みたく存候。		竹越与三郎三又書翰
6	30	6-3 朝顔をおくる	横文体	贈答	肅啓	一大革新ならんと存候。		竹越与三郎三又書翰
7	32	書簡文無し						
8	32	8-7 修善寺	混合文体	報知	三啓。	草々拝具。		尾崎紅葉草紅葉
9	33	書簡文無し						
10	33	10-19 某生にあたふ	文語文体	忠告	寒威とみに加りたるを、	千萬自重せよ。		落合直文、萩家遺稿
【備考】								
・目次には各課名の書簡文には(書翰文)と書かれているが、表では省略する。								
・巻10のみ(書翰文)ではなく(消息文)となっている。								

『芳賀中38年版』と『芳賀中43年版』に採録された書簡文を〈表1〉、〈表2〉に整理した。課名の前にある例えば「1-7 学友慰問の文」の1-7は、巻1の7課をさす。また差出人・受取人・年月日は教材文に書かれているものを記し、出典は教材の最後に書かれているものを記載した。

『芳賀中38年版』には17通、『芳賀中43年版』には15通の書簡文が採録され、採録の割合は前者が6.1%、後者が4.8%と減少傾向にある。採録された書簡文は『芳賀中38年版』からの継続がほとんどであるが、『芳賀中43年版』を中心にみると、「1-3 田舎の友より」、「3-7 外国語を知るの必要」が新たに追加されている。その一方で、「2-27 妹へ手紙」、「3-26 英国富強の原因」、「6-9 パノラマの構造」、「7-28 香川景樹の書翰」が削除されている。「2-27 妹へ手紙」は、兄竹雄が妹のまつ子に出した書簡である。当時の中学読本に採録された書簡文の多くが男性から男性、高等女学校読本では女性から女性を中心であった中で、兄妹であっても男性から女性に出している書簡を採録したことは新しいといえる。「3-26 英国富強の原因」は、英国の強さがどこにあるかを説いた書簡である。冒頭には、「英国が今日の如き富強国と相成候は、商業の進歩による事にて、商業の進歩せし原因はもとより種々可有之候へども、其重なるものは、地理上の便益と国民の気力との二つによる事と存候。」とした上で、最後に「日本国も島国にて、地勢は英国と同様に御座候へば、これより国民の一同大奮発にて、英国の富強に追附く様勉強を致さねばならずと存候。英人は全世界に領土ある故、常に日没せざる国と誇称致居候。今や東洋の日出国と西洋の日不没国と同盟を取結候も、何かの因縁に可有之、両国提携して、我國民も平和の戦争即ち商業の上に大功業を立てたきものに御座候。」としている。「6-9 パノラマの構造」は、本文の最後に出典として「森鷗外、つき草」とある。冒頭は『『パノラマ』かく

には、その骨組みをこしらへ候事、最初的手段に候。」からはじまり、約10頁（約2600字）にわたりパノラマ作成について説明している。冒頭から分かるように、差出人や時候の挨拶等はなく、いきなり本論に入っており、内容から説明文、品物の説明書的な文章といえる。「7-28 香川景樹の書翰」を書いた香川景樹は、江戸後期の歌人で、賀茂真淵や村田春海、加藤千蔭（橘千蔭）らと論戦したとされている。採録された書簡では、歌への思いを述べている。削除された書簡文の多くが後述する〈表3〉にも示したが忠告文である。

『芳賀中43年版』に加えられた書簡文は、「1-3 田舎の友より」、「3-27 外国語を知るの必要」の2通である。「1-3 田舎の友より」は、「拜啓、其後御起居如何に候や。昨秋一家拳つて此地に移り候ひてより、往来する友もなく、日々一里の道を学校に通ふのみにて候ひしが、この頃は学校は休に相成り、又春の景色に自ら心もうき立ち候へば、日々弟妹と共に田野の間を歩き回り、例の水彩画をも試み候。」からはじまり、友達に引っ越した田舎の様子について書いている。これが、巻1に採録されたことは、学習者と同年代の者からの書簡であり、学習者としてもあり得る状況ということから、書簡の手本となるものといえる。「3-27 外国語を知るの必要」は「世界的国民として、一步を海の外に踏み出すには、大胆に、勇敢に、飽くまでも進取的ならざるべからざることは申すまでも無きことに候。」とした上で、「如何にして善く進取的なるべきかと云ふに、外国語を知るは、即ちこれが一手段たるべしと存じ候。」と書いている。そして、最後に「世界的国民たる資格を作るに最も急要なるは、即ち外国語を知る事に御座候。」とまとめている。『芳賀中38年版』では、英国の富強について述べた上で、日本人として今後どうあるべきかを述べ、『芳賀中43年版』においては、外国に目を向け対抗するためには外国語の力を付けることが重要であると説くのである。これらは、書簡文の形式を生かした意見文、論説文といえる。また、前述した森鷗外の「パノラマ」においても、書簡文の形式を借りた説明文といえる。このことから、書簡文の読み手がいるという特性を生かし、書き手が主張することを書簡文という形式を活用して、読者その人に忠告しているという効果があると考えられる。編者や社会が主張したいことを書簡文の形式を借りて学習者に読ませる意図がそこに看取でき、ただ単に書簡文を書くための模範文、名家の書簡を読ませるための採録だけではなく、読んで内容を理解させ、考えを方向付けていくそのような役割がみえてくるのである。学習者は、書簡文の形式で書かれた説明文や意見文、論説文を読むことによって、あたかも自分自身に語り掛けられている意識で読むことになると考えられる。そのような意味において、書簡文は重要な教材といえるのである。

〈表3〉芳賀編纂中学読本の書簡文の内容項目一覧

年代	『芳賀中38年版』		『芳賀中43年版』	
内容項目	書簡	割合	書簡	割合
報知	4	23.5%	5	33.3%
報知(旅儻)	2	11.8%	2	13.3%
忠告	6	35.3%	4	26.7%
招待	1	5.9%	1	6.7%
贈答	1	5.9%	1	6.7%
弔意	1	5.9%	1	6.7%
見舞	1	5.9%	1	6.7%
返信・礼状	1	5.9%		
合計	17	100.0%	15	100.0%

次に、書簡文の内容から内容項目を設定し〈表3〉に整理した。芳賀の書簡文で多く採録されているのが忠告文であるが、上記以外で『芳賀中38年版』と『芳賀中43年版』の両方に採録されたものは、「三老人」、「銀行に入りし少年に」、「某生にあたふ」の3通である。「三老人」は、70歳の三老人の古稀の長寿祝賀会

の時に長寿の秘訣を聞き、一人一人の回答を書いたものである。そして、最後に「三老人の説を集めて考へ候に、規則正しき生活をなすこと、正直なる心をもつこと物事に心配せぬこと、この三つは成程長寿の方法に相違あるまじと合点いたし候。たゞ衛生法をやかましく注意するのみにては、到底長寿は得られぬこと、悟り候。」と締めくくっている。人として、どのように生活し、歩み、生きていくかを知らしめる書簡といえる。「銀行に入りし少年に」は、「ロスチャイルド家創業の主人が、其実験より得たる知恵なりとて、其一家の少年少女に読ましむるは勿論、其銀行の壁上に大書せるものなりとて、持離さるゝ座右の金言見当り候まゝ、物に代へて供貴覧候。一、事務を取りては、瑣末なる事までも仔細に吟味すべき事、二、万事に敏捷なるべき事、三、熟考は長く、決断は速にすべき事（後略）」というような文言を18まで書いている。これは、銀行とはとあるが、人生訓的な内容で卒業後の生き方の指針となるものである。「某生にあたふ」の末尾には「落合直文、萩の舎遺稿」とある。内容は、ある人物から送られた原稿を読み「漢文の素養少なきこと」を指摘し、落合なりの国文学や国文学者に対する考えを述べ、「(国文学者等が書いた文章について 引用者補) いづれも読者をして飽かしめざるところ、さすがは文章家なり。されどなほ余は満足することあたはざるなり。(中略) 足下年まだわかし。今より漢文に心を用るよ。さてはその文更に大に見るべきものあるにいたらん。」としている。某生宛ての書簡ではあるが、読み手である学習者は漢文の重要性を自分に問われているかのように捉える効果があると考えられる。

芳賀の書簡に多く採録されている忠告文に注目してみたが、採録書簡文においては、書くための書簡文の模範としての採録もあるが、読むことによって内容を理解させていく教訓的な書簡文もあり、多様な観点から人としての生き方、有り様を示している書簡の採録がなされているといえるのである。

また、芳賀編纂中学読本の両方に採録されている「海軍兵の生活」、「陸軍兵の生活」も、報知として、海軍兵、陸軍兵の生活を説明している文章で、男子生徒に国粋への意識をもたせるものである。これらも、書簡文という形式を活用することによって、より身近なこととして捉えることができるといえる。そして、それは、書簡文の特性として読み手がいてその人に語り掛けるように書かれていることによるものと考えられる。

報知（旅信）も両読本に「小笠原島だより」と「越後より東京に」の2通が採録されている。報知（旅信）は、書簡文の中でもその土地で見たことやその様子、思ったことを自由に書くことができる自由作文に近い書きぶりができる書簡といえる。

同時期に発行された『落合中 38 年版』、『吉田中 40 年版』の書簡文の内容項目で採録割合の高い項目をみると以下のようなものである。

	報知	報知（旅信）	忠告
『芳賀中 38 年版』	23.5%	11.8%	35.3%
『芳賀中 43 年版』	33.3%	13.3%	26.7%
『落合中 38 年版』	37.5%	18.8%	18.8%
『吉田中 40 年版』	13.3%	20.0%	40.0%

落合編纂中学読本の内容項目忠告書簡文の変遷をみると次のようである。

『落合中 34 年版』（『中等国語読本』M34.11.19 発行）

「人の三景の優劣論を駁する書」

『落合中 35 年版』（『中等国語読本』M35.2.7 訂正再版発行）

「人の三景の優劣論を駁する書」

『落合中 36 年版』（『訂正中等国語読本』M36.10 発行）

「人の三景の優劣論を駁する書」、「西郷隆盛に与ふる書」

『落合中 38 年版』（『再訂中等国語読本』M38.11 発行）

「友人におくる書」（三餘雑録）、「公子の躰方を申し遣す書」（徳川齊昭）、「西郷隆盛に与ふる書」（山縣有朋）

それぞれの内容については中嶋真弓（2023）に詳しいが、これらの書簡も名家の書簡としての役割とともにものの見方や男子としての生き方を考えさせる内容を有しているといえる。

上記の4つの版の落合編纂中学読本のすべてに採録されている報知（旅信）は、「小笠原島通信」、「ポートセッド（ポートサイド）より友に寄する書」、「月夜逗子の友人に寄する書」の3通である。「小笠原島通信」は、芳賀編纂中学読本の両読本にも「小笠原島だより」として採録されている。

吉田編纂中学読本の内容項目忠告と報知（旅信）の書簡文で長きにわたり採録されているものを以下にあげてみる。

〈忠告〉

『吉田中 40 年版』から『吉田中 T12 年版』まで採録されていた書簡文

「血気に戒む（血気）」（維新史料 吉田松陰）、「寺門政二郎に答ふる（寺門政二郎に答ふ）」（藤田東湖）

『吉田中 40 年版』から『吉田中 T7 年版』まで採録されていた書簡文

「公子の躰方を申し遣はす」（徳川齊昭）、「妹にさとす」（俗簡襍輯 吉田松陰）

〈報知（旅信）〉

『吉田中 40 年版』から『吉田中 T12 年版』まで採録されていた書簡文

「修善寺便り（雨の修善寺）」（紅葉書簡抄 尾崎紅葉）

『吉田中 44 年版』から『吉田中 T7 年版』まで採録されていた書簡文

「日光便り」（青蘆集 徳富蘆花）

なお、対象とした吉田編纂中学読本は、『吉田中 40 年版』（『中学国文教科書』M40.1.1 訂正再版発行）、『吉田中 44 年版』（『中学国文教科書』M44.1.28 修正 4 版発行）、『吉田中 T1 年版』（『中学国文教科書』T1.12.23 修正 8 版発行）、『吉田中 T7 年版』（『中学国文教科書』T7.1.5 修正 12 版発行）、『吉田中 T12 年版』（『中学国文教科書』T12.10.18 修正 5 版発行）の 5 種類である。

吉田編纂中学読本に長きにわたり採録された忠告文では、「公子の躰方を申し遣はす」（徳川斉昭）、「血気を戒む（血気）」（吉田松陰）、「妹にさとす」（吉田松陰）、「寺門政二郎に答ふる書」（藤田東湖）がある。「公子の躰方を申し遣はす」は、徳川斉昭が子どもたちの躰について女中頭の吉田に事細かにかつ厳しい内容を指示した書簡である。本文中には、「風を引き申すべしなどとして、用心致させ候は以つての外に候。とかく武士の子は手づよく、手あらに成長致し申さず候うては、追ひ追ひ成長の上、公家や町人出家の様に成り行き、天下の御為を致し候様に相成らざるゆゑ、何分にも手強くからだを幼年より鍛へて育て候様に致したく候。さて、文武共に精致させ候が宜しく候。文武を励ませ、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候うても苦しからず候。他へ養子に遣はし候うても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず」ともある。「血気を戒む（血気）」（吉田松陰）は吉田松陰が門弟である中谷正亮、久坂玄瑞、高杉晋作等の粗暴に陥るを戒めた書簡で、広瀬豊（1937）は「有名な書簡」（p.193）としている。「妹にさとす」の頭注には「安政六年四月十三日松陰が野山の獄に在りて長妹千代子に与へしもの」とある。妹の千代に、「『禍福繩の如し』といふ事を御悟なるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間万事塞翁が馬に御座候」と説くのである。「寺門政二郎に答ふる書」（藤田東湖）について高須芳次郎（1943）は「嘉永五年閏二月十六日に東湖は宅愼を解かれ自由の身となつた。そして長い謹慎中に種々世話になつた寺門政次郎に礼状を与へたのが本書簡である。この書簡は、『心事粗吐露仕候』とある通り、単に礼状にとゞまらず、憂国の志士の面目を発揮して、世学の弊について彼れの意見を述べてあるので、東湖の全貌を知る上には有力な文献である。(一)学問事業が一致せねばならないこと。(二)読書は博いよりも深い方が好ましく、漠然と読むよりも、例へば著述といった如く一つの目的を持つた方が心に入る度が深いこと。(三)文章は修行が肝腎なこと。(四)日本精神を忘れた学問は価値がないことなど、大体こゝに触れてゐる世学の弊は、そのまゝ東湖が（*ママ）学問に対する態度と見られる」（pp.129-130）と評している。

吉田編纂中学読本の忠告の書簡には、吉田松陰の書簡が 2 通採録されている。吉田松陰の書簡は、その他吉田編纂高等女学校読本、吉田編纂実家高等女学校読本にも採録されている。徳川斉昭は、幕末の水戸藩主、吉田松陰は幕末の志士、藤田東湖は幕末の儒学者で時代的には江戸時代のものである。これらは、書簡文として書くための提示ではなく、男性としてどうある

べきかという生き方を読み理解する、男性は強くたくましくあれといった精神を知らしめる学習材といえる。

このように、忠告文は、名家の書簡を読ませその内容を理解し人としての生き方を考えさせ、方向付ける意図を有して採録されていることが看取でき、編者によって採録書簡文は異なるが、根底にある意図は同様のものが存在すると考えられるのである。

3. 芳賀矢一編纂中学読本の文体および頭語・結語の特徴

芳賀が採録した書簡文の文末文体の数値から文体を割り出し整理したものが〈表4〉である。

〈表4〉芳賀編纂中学読本の文体の変遷

読本名	『芳賀中38年版』		『芳賀中43年版』	
	割合	書簡数	割合	書簡数
口語文体	5.9%	1	6.7%	1
文語文体	5.9%	1	6.7%	1
候文体	58.8%	10	46.7%	7
混合文体	29.4%	5	40.0%	6
合計	100%	17	100%	15

本稿では文体の捉えを北澤尚(1999)の分類に依拠し、次のように規定する。

・ 候文体 = 総文数 80% (少数第二位を四捨五入) 以上の文末が「候」で終わる文。

- ・ 文語文体 = 総文数 80% (少数第二位を四捨五入) 以上の文末が文語形で終わる文。
- ・ 口語文体 = 総文数 80% (少数第二位を四捨五入) 以上の文末が活用語の口語形で終わる文。
- ・ 混合文体 = 上記の3分類に属さない文。

なお、本論文では、読本に採録されている和歌・俳句、「」(かぎかっこ)の部分は、数値化していない。

文体をみると、1通ではあるが口語文体がみられる。口語文体は両読本に採録されている「学友慰問の文」である。「御病気は昨今いかゞですか。」で始まる書簡文で、友達の病気見舞いの書簡である。学校の様子や先生が代わったこと、部活動のことを記し「君の雄姿を見んことを切に祈ります。」で終わっている。同年代の学友への書簡は、学習者の日常生活でも経験することであること、口語文での採録であることから書簡文を書く模範文として採録されていると考えられる。芳賀は書簡文について、芳賀矢一・杉谷虎蔵(1913)『書翰文講話及文範 上巻』の冒頭で「余等の理想とする書翰文は候文では無くして、口語文である。候文は過度の時代としてやむを得ず、今日、使用して居るので、早晚廃止せらるべきものである。」と述べている。また、明治38年に芳賀が記した「手紙の文について」(1905)にも次のように述べている。

社会では容赦なく昔風の候文の草書が行はれて居る故、学校でもいくらかその稽古をさせねばならぬ。小学校の義務教育時代にすら、候文を少しづつ教へねばならぬ。中学校でも勿論教へねばならぬ。文語と口語と二つ教へる上に、もう一つ手紙文体を教へねばならぬから、其繁雑は一と通りでは無い。しかも学校で少し位やらせても、実は何の役にも立たぬ。(中略)要するに候文の形式をやめること、草書で書くのをやめること、この二つを実行するのも、今後の手紙文改良の一つではあるまいかとおもふ。

しかし、口語文体の書簡文が1通ということは、当時書簡文は候文体で書くという意識が社

会的にあったことからによるものと考えられる。『落合中 38 年版』をみると口語文体の書簡文は採録されていない。また、吉田編纂中学読本においては『吉田中 44 年版』「郷里の友に」で初めて口語文体の書簡文が登場している。

『落合中 38 年版』と『吉田中 40 年版』の文体は以下のようである。

	口語文体	文語文体	候文体	混合文体
『芳賀中 38 年版』	5.9%	5.9%	58.8%	29.4%
『芳賀中 43 年版』	6.7%	6.7%	46.7%	40.0%
『落合中 38 年版』	0%	31.3%	56.3%	12.5%
『吉田中 40 年版』	0%	6.7%	73.3%	20.0%

吉田編纂中学読本の候文体が 50% 台 (53.8%) になるのは『吉田中 T12 年版』からである。落合は文語文体を候文の次に採録し、芳賀は文語文体と候文体が混合した混合文体の文章を採録していることが分かる。前述したように書簡文は候文体で書く、候文体が読めることが重視されていたこと、文体規範が明確でないことが看取できるのである。

次に頭語・結語をみていく。芳賀の採録書簡文の頭語・結語を〈表 5〉、〈表 6〉、〈表 7〉に整理した。なお本稿では、文頭において本論から書き始めている場合、末尾において本論のまま終わっている場合は「頭語なし」、「結語なし」として数値化した。また「頭語」-「結語」の分類は、茗荷円 (2017) に依拠した。

往信の頭語では「漢語系」が多く、次に「頭語なし」が続いている。「漢語系」が多いのは男性から男性への書簡文採録が多いために、男性は「漢語系」を使うという意識があるものと考えられる。それは、結語との対応関係からみても分かる。また芳賀は、両読本の巻 1、巻 2 に採録した書簡文には差出人・受取人を付している。これらのことから、芳賀は早い段階で読本においても書簡文の形式や作法を身に付けさせることを意識していたと考えられるのである。『落合中 38 年版』と『吉田中 40 年版』の「頭語なし」(往信)の割合をみると前者は 86.7%、後者は 55.6% である。また往信の頭語の「漢語系」では、『落合中 38 年版』は 6.7%、『吉田中 40 年版』は 33.3% である。結語の「漢語系」、「結語なし」の割合をみると、『落合中 38 年版』は「漢語系」62.5%、「結語なし」31.3%、『吉田中 40 年版』では「漢語系」60.0%、「結語なし」26.7% である。頭語(往信)で多く使われている「漢語系」をみると、『落合中 38 年版』では「頓首再拝」のみで 6.7%、『吉田中 40 年版』では「拝啓、肅啓、再啓」で 33.3% である。

〈表5〉芳賀編纂中学読本の頭語の変遷（往信）

頭語	種類	『芳賀中38年版』			『芳賀中43年版』		
		書簡数	頭語別割合	種類別割合	書簡数	頭語別割合	種類別割合
肅啓	漢語	4	25.0%	50.0%	4	26.7%	66.7%
拝啓		2	12.5%		4	26.7%	
前略		1	6.3%		1	6.7%	
三啓		1	6.3%		1	6.7%	
一書拝啓仕候。	その他	1	6.3%	6.3%	1	6.7%	6.7%
頭語なし		7	43.8%	43.8%	4	26.7%	26.7%
合計		16	100.0%	100.0%	15	100.0%	100.0%

〈表6〉芳賀編纂中学読本の頭語の変遷（返信）

頭語	種類	『芳賀中38年版』			『芳賀中43年版』		
		書簡数	頭語別割合	種類別割合	書簡数	頭語別割合	種類別割合
頭語なし		1	100.0%	100.0%			
合計		1	100.0%	100.0%	0	0.0%	0.0%

〈表7〉芳賀編纂中学読本の結語の変遷

結語	種類	『芳賀中38年版』			『芳賀中43年版』		
		書簡数	結語別割合	種類別割合	書簡数	結語別割合	種類別割合
かしこ	漢語系			50.0%			57.1%
あなかしこ							
匆匆		1	6.3%		1	7.1%	
謹言		1	6.3%		1	7.1%	
敬具		1	6.3%		2	14.3%	
匆匆頓首		1	6.3%		1	7.1%	
早々		1	6.3%				
頓首		1	6.3%		1	7.1%	
不一		1	6.3%		1	7.1%	
草々拝具		1	6.3%		1	7.1%	
結語なし		8	50.0%	50.0%	6	42.9%	42.9%
合計		16	100.0%	100.0%	14	100.0%	100.0%
【備考】							
・両読本に採録されている「越後より東京に」は「下略」となっているために、結語としてカウントしないこととする。							

結語の「漢語系」をみると、『落合中38年版』では「早々敬具、不備、匆匆頓首、早々、頓首、草々、草々不宣」で88.9%で、『吉田中40年版』では「匆匆、不具、以上、頓首謹言、匆匆頓首、匆匆、頓首、草々、草草」で60.0%である。頭語より結語に「漢語系」が多く使われていることが対象読本から分かるが、現在のような「拝啓-敬具」のような対応関係が定まっているとはいえない。また、女性につかわれる「あなかしこ」や「かしこ」といった「かしこ系」は、落合編纂中学読本や吉田編纂中学読本にわずかながらみられるが、芳賀編纂中学読本にはみられない。

4. 芳賀矢一にみる書簡文教材の提示

『芳賀中 38 年版』、『落合中 38 年版』、『吉田中 40 年版』の 3 読本すべてに共通して採録されている書簡文はないが、『芳賀中 38 年版』、『吉田中 40 年版』では「修善寺便」、『芳賀中 38 年版』、『落合中 38 年版』では「小笠原島だより」がある。

「修善寺便」では、『芳賀中 38 年版』が「修善寺便」、『吉田中 40 年版』は「修善寺便り」の課名で採録している。しかし採録箇所は違い、芳賀は「三啓。然者八九十一と四日ぶつとほしの雨には遊履朽ちて椎茸を生じ、病腸潰えて泥濘の如く、是に到りて、山景溪韻も徒に人を悶殺するに過ぎず候。」から始まり「恋しきは都。子たちもさぞや待つらんと存候へば、近きに帰宅可致候。草々拝具。」で終わっている。吉田は、「再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘擎して川向の小山なる頼家公の墓を拝し申し候。」から始まり「本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆、草餅を貰ひ、夜に入りて静霞子より新杵の一折を贈られ候。胃病の人毎に餓鬼の如し、幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草草不盡。」で終わっている。付記するが、芳賀矢一編『訂正新定中学読本 全 10 巻』（T1.12.23 訂正 4 版）にも「修善寺便」が引き続き採録されているが、芳賀矢一編『改訂帝国国語』（T7.12.13 改訂三版発行）では、「5-9 雨の修善寺より」の課名で『吉田 40 年版』と同様の箇所の採録となっている。なお、吉田編纂中学読本も、『吉田中 T7 年版』、『吉田中 T12 年版』の課名は「雨の修善寺」としている。

「小笠原島だより」では、『芳賀中 38 年版』が巻 3 に「小笠原島だより」、『落合中 38 年版』も巻 3 に「小笠原島通信」として採録している。同一の書簡であるが、一部省略したり表記に差異がみられたりするが、ここでは同一としておく。表記の差異については例えば、冒頭『芳賀中 38 年版』は、「一書拝啓仕候。今回出発につき万事御配慮を蒙り候段、深く奉謝候。」としているのに対し、落合は「一書拝啓仕候。今回出発につき、万事、御配慮を蒙りし段、深く、謝し奉り候ふ。」（なお、ここでの引用は 1904（M37）年 12 月 25 日 35 版『訂正中等国語読本』を使用した）というように、書き下して読みやすくして提示している。それに対して、芳賀の文章は漢語的な文章となっているといえる。その傾向は、『芳賀中 43 年版』においても同様で、ほぼ同一の採録であるが、以下の部分に修正がみられる。修正部分のみ『芳賀中 43 年版』に下線で記した。なお、①等の番号は稿者が便宜的に『芳賀中 43 年版』を中心に付けたものである。

『芳賀中 38 年版』	『芳賀中 43 年版』
①当地著後無風若しくは南風にて出帆するを得ず。いづれ近日出発の運に相成るべくと存候。 <u>当島</u> は余程有利の地なる様	①当地著後無風若しくは南風にて、 <u>出帆</u> するを得ず。いづれ近日出発の運に相成るべくと存候。
③唯々気候内地とことにして、	② <u>当島</u> は余程有利の地なる様
④唯々父島の港は非常に宜しければ、若し南洋の通商繁昌するに至らば、此島は薪水の為に是非とも碇泊せざるを得ざる所たるべくと存候。	③ <u>たゞ</u> 気候内地とことにして、
⑤皆徒跣にて土上を歩み、多くはカノー船にて正覚坊を取り、掌大の玉蜀黍を植え、	④ <u>但</u> 父島の港は非常に <u>宜しく</u> 、若し南洋の通商繁昌するに至らば、此島は薪水の為に、是非とも碇泊せざるを得ざる <u>處</u> たる <u>べし</u> と存候。
⑥小谷三郎君其留守にて、小生非常の厚遇を受けたり。身体は強健にして、内地に居りし時より気分常に愉快になり。	⑤皆徒跣にて土上を歩み、多くはカノー船にて正覚坊を <u>捕り</u> 、掌大の玉蜀黍を植え、
	⑥小谷三郎君其留守役にて、 <u>非常</u> の厚遇を受け <u>申候</u> 。身体は強健にして、内地に居りし時より気分常に愉快に <u>候</u> 。

①②は、段落分けをしたのであるが、他の部分は『芳賀中 38 年版』においても段落分けがなされている。⑥では、「～たり」、「～なり。」を「～候」にしている。読本として、学習者に読みやすくした修正と捉えることができる。

5. 結論

本稿では、明治期から大正期にかけて継続的に発行され芳賀編纂中学読本を、落合編纂中学読本と吉田編纂中学読本とを比較対照することによって、当時の書簡文の特徴やその役割について検討してきた。採録書簡文においては、編者の教育観、教材観によって差異はみられたが、採録書簡文の内容項目を検討することによって書簡文の役割が看取できた。採録書簡文の内容では、報知、報知（旅信）、忠告が多く採録されていることが分かった。そして、報知（旅信）は、比較的自分の思いや考えたことを書くことができるという作文との関わりが強い書簡だといえる。また、忠告文においては、社会が求めることを学習者に理解させる手立てとして、より訴えかける効果がある書簡文の形式が活用されたものと考えられる。それは、ただ読者として第三者的な読みから、自分のこととして置き換え臨場感をもって内容を捉えることができるためのツールとして書簡文が活用されたことにつながる。本来なら説明文や意見文、論説文といった理論的な文章であるものが、書簡文という人情味あふれる親しみやすい形式を活用することによって内容を注入することができるのである。そのような意味において、ただ書簡文を読んで書くという書簡文のジャンルを超えた「書簡文の役割の拡大」がみられるといえるのである。

今後、さらに中学校で多く活用された中学読本の書簡文の変遷を検討し、書簡文が教材史に

においてどのような位置付けにあるかを明らかにしていきたいと考えている。また、中学校と高等女学校、実家高等女学校の書簡文採録の変遷を内容や文体、頭語・結語といった書簡文の構成要素から検討し、性差による役割についても明らかにしていきたいと考える。

引用文献・参考文献

- 井上敏夫（1981）『国語教育史資料第二巻教科書史』東京法令出版。
- 甲斐雄一郎（2005）「1900年前後における中学校国語及漢文科の展開」『全国大学国語教育学会 国語科教育研究 大会研究発表要旨集』108,pp.127-130.
- 甲斐雄一郎（2008）『国語科の成立』東洋館出版。
- 北澤尚（1999）「明治時代の女学生の書簡の文体」東京学芸大学紀要出版委員会『東京学芸大学紀要第2部人文科学』50,pp.269-281.
- 佐藤正範著（1908）『女子書簡文』六盟館。
- 高須芳次郎（1943）『藤田東湖全集第五巻』研文書院。
- 橘豊（1998）『手紙文の国語学的研究』風間書房。
- 中嶋真弓（2018）「芳賀矢一編『新定女子読本』にみられる書牘文の考察」愛知淑徳大学教育学会『学び舎』第13号,pp.52-61.
- 中嶋真弓（2019）「吉田彌平読本にみられる書簡文教材の一考察－芳賀矢一読本との比較を通して－」全国大学国語教育学会『国語科教育』第85号,pp.32-40.
- 中嶋真弓（2019）「吉田弥平高等女学校読本における演習問題の一考察－書簡文に付された演習問題を中心に－」論集編集委員会『愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇』第9号,pp.27-38.
- 中嶋真弓（2019）「実科高等女学校にみる書簡文教材の一考察－吉田彌平他3名編『女子国語読本実科用』を中心に－」愛知淑徳大学文学部論集編集委員会『愛知淑徳大学－文学部篇－』第44号,pp.99-110.
- 中嶋真弓（2023）「『中学校教授要目』（明治35年）前後における書簡文教材の一考察－落合直文読本を中心に－」論集編集委員会『愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇』第13号,pp.13-25.
- 芳賀矢一（1905）「手紙の文について」『手紙雑誌 第二巻第五号』有楽社,pp.2-4.
- 芳賀矢一・杉谷虎蔵（1913）『書翰文講話及文範 上巻』富山房,p2
- 芳賀矢一（1912）「国語教科書編纂につきて」『信州教育』第231号,pp.35-41.
- 芳賀矢一選集編集委員会編（1987）『芳賀矢一選集 第4集上』国学院大学。なお初出は「文章研究録」（1914）である。
- 広瀬豊（1937）『吉田松陰書簡集』岩波書店。
- 茗荷円（2017）『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう。
- （本研究は、愛知淑徳大学研究助成令和4年度特定課題研究「明治後期から大正期の書簡文教材史研究」の成果の一部である。）

